えべつの未来づくりミーティング

～ 地域経済に関わりの深い方（ＪＡ道央・ＪＡ道央青年部）編 ～

令和４年６月９日（木）　江別市民会館２階２３号室
午後６時～午後８時

１ 江別市の「強み」「弱み」は

・強みは、札幌市の近郊に位置して、どこに行くにも整った道路環境があり、交通アクセスが良いこと。自分の住む豊幌地区は、定年退職された高齢の方が多いが、自然の中で犬と散歩している姿などを見ると、自然環境の良さを感じる。弱みは、江別市は住み良さが評価されているが、全国的に知名度の高いものが少ないこと。北広島市はボールパーク建設で注目されており、地価も上がっていると聞いている。江別市にも、何か人を呼び込むものがあれば良いと思う。

・強みは、札幌市に近いことと、交通アクセスの利便性が高いこと。生活していて、とても便利なまちだと思う。大きな病院があり、スーパーマーケットもある。江別市の特産品を使ったスイーツもあり、「えぞ但馬牛」もある。衣食住のうち、食と住は充実している。弱みは、スイーツや特産品など素晴らしいものがあるが、江別市民だけが知っていて、市外ではあまり知られていないことが多い。北海道の食を紹介するテレビ番組などでも、札幌市や小樽市などは出てくるが、江別市の話題は少ない。自分が勤めている農業法人の人材を確保するために、江別市内の大学生をはじめ、市外の大学へ就職説明会に行くことがあるが、江別市の魅力をアピールしづらく、他の地域との差別化が難しいと感じている。また、大学生の雇用の受皿が少ないのではないかとも思う。

・強みは、札幌市に近いことと、買物も娯楽も、江別市内である程度完結できること。弱みと感じているものは、特にない。

・強みは、札幌市や新千歳空港に近い立地の良さ。弱みは、江別市に住んでいるが、勤め先は札幌市という人が多いこと。江別市内に大きな会社が比較的少ないと思う。また、土日に子どもを連れて出かけようと考えた時、子どもを遊ばせることができる大きな公園がないと感じる。

・強みは、交通アクセスの良さ。弱みは、江別市内の企業情報が得にくいこと。自分が江別市内の大学生だった時、企業説明会に参加したが、江別市の企業があまりなかった。せっかく江別市内で実施する企業説明会だったので、もっと市内の企業が来てくれれば良いと思ったことがある。

・強みは、札幌市に近いほか、スーパーマーケットなど日用品を買うところが多く、小さな公園も多く、身近に自然を感じることができること。大学も四つあるが、狭い範囲に大学が四つある地域は珍しいのではないかと思う。大学生と関わって感じることは、大学生の発想と行動力は素晴らしく、大学生は江別市の財産だと思う。弱みは、公共交通機関だけで移動しようとすると、江別蔦屋書店や大型ショッピングセンターに行きづらいこと。江別蔦屋書店は観光ポイントとして若い人たちに注目されている場所だが、車がないと行きづらいことが残念である。

2 江別市における将来の地域農業の活性化策について

・ロボット化、ICT化については、JA道央青年部でもよく話し合いをしている。今使っている農作業用のGPS基地局が江別市から20キロほど離れている長沼町にあるのだが、距離が離れているので通信が途切れることがあると聞いた。江別市にGPS基地局を設置することが、江別市のこれからの農業の発展につながるのではないだろうか。農業就業人口が減って、人手の確保が難しくなってきている中、今後はスマート農業の推進で補われていくと思うので、是非GPS基地局を江別市に設置してほしい。

・スマート農業による自動運転が導入されると、田に苗を植える時も、きれいに植えることができる。ハンドルが自動で動くので、事故率も下がる。害虫や病気を防ぐ農薬や肥料も、均一に散布されるので、少量で済む。ただ、GPS基地局が長沼町にあるので、通信が途切れて測位がずれことがあり、この状況が今後も続くと、普及が進まず、未来の農業にとって損失になると思う。スマート農業が進めば、就農人口が増えるかもしれないし、アルバイトの方が少なくても営農を継続できるので、江別市にGPS基地局を設置してほしい。農業法人としては、スマート農業が進むと、パートや従業員の減少につながるかもしれないが、その問題は分けて考えるべきだと思う。数年前、JA道央青年部では、地域の大学と連携して、期間雇用や大学生の夏休みを利用したインターンシップで農作業を手伝ってもらったこともあったが、どうしても一組織でできることは限られるので、江別市がJA道央と連携を深めて大学生への働きかけを進めてくれるとありがたい。

・離農とともに、一農業経営者当たりの耕地面積が今後も増えていくと思う。米や麦などの穀物は面積が増えても栽培できるが、野菜は収穫に手間がかかるので、生産しても手に負えなくなる。そうなると、野菜より手間がかからない麦に変更しようかと考える農家が増えるのではないだろうか。スマート農業による自動運転が普及すれば、省力化が進むと思う。

・今もドローンを使って農薬を散布しているが、とても早く作業ができる。これからも技術は進歩していくと思う。

・JA道央では、GPS基地局を利用するためのアプリ利用の受付をしている。昨年、今年と利用者は増えている。費用がある程度かかるので、躊躇している人もいる。スマート農業の普及を一緒に進めていく立場であり、実際に利用している状況を見る機会や詳しい知識をもう少し身につけたい。農業者の高齢化が進み、作付けを辞める人も見られる中、スマート農業の普及に向けて後押ししていくことが必要だと思っている。

・JA道央でもパートを募集して農家に斡旋しているが、50～70歳代の方が多い。江別市には大学生が多いので、大学生にもっと手伝ってもらえないだろうかと思っている。JA道央青年部の活動として、江別第一小学校では、食育の授業（グリーンスクール）を行っている。そういう活動を通じて、子どもたちがもっと農業を身近に感じ取るようになってほしい。

・大学連携の立場からも、大学生と一緒に何かできないかと考えている。農作業アルバイトは大変そう、朝が早そうなどのイメージを持たれているかもしれないが、夏休みなどは力を借りられるのではないだろうか。ココルクえべつには交流農園があり、酪農学園大学で農福連携を進めている先生に手伝ってもらっている。江別市にも、障がい福祉に関係する事業者でつくる組織があるので、その組織と連携して、新たに農福連携の機会をより多くマッチングして生み出せたら良いのではないかと思う。食育については、令和2年度の江別市の学校給食では、全体の52%は江別産の野菜を使っている。給食を通じて、江別産の農作物を作っている人たちに触れてもらうことも大事だと思う。

・野幌地区で農福連携を行っている農家からは、労働力としてしっかりと働いてくれると聞いた。農福連携をしてみたいと思っても、どこでつながれば良いか分からない状況で、農福連携の情報が生産者に届きやすくなれば良いと思う。

・以前、農福連携で障がい者の方に手伝ってもらっていたことがある。支援事業所の職員の方も同伴してくれた。除草作業などの単純作業は、一生懸命やってくれるので適性があると思う。ただ、天候が日々変わる中、雨が降って作業ができない時などに、代わりの仕事をやってもらうことが難しい。そういう部分をサポートしてもらえる仕組みがあれば良いと思う。

3　人口減少が進む中で、江別市が力を入れるべき分野について

・人材や後継者の不足は、他の産業でも課題になっている。江別市には元気な高齢者（アクティブシニア）もたくさんいるし、四つの大学の大学生もいる。それらの方々の力を借りながら、産業を盛り上げていくべきだと思う。また、各分野が連携していくことが必要で、農業であれば、グリーンツーリズムなど、観光や教育との連携が考えられる。まちのにぎわいも、店を増やすだけでなく、いろいろな世代が魅力を感じるようにすることが大事で、子育て世代や移住希望者へのアプローチも必要だと思う。

・アクティブシニアが活躍できるように政策を進めていくことが大切だと思う。また、江別市でも、若い世代の一人暮らしが増えているので、婚活などの情報があれば、もっと発信してほしい。

・国道12号と275号のほか、高速道路も通っており、JRも多くの人が利用しているので、その強みを生かさなければ、もったいない。人が溜まる、集まる、お金を落とすまちになると良いと思う。江別市の魅力を一つでも多く発信したらどうか。

・今は、住むだけのまちになっている。ランドマーク的なものができれば、観光などで人の流れが増えるのではないかと思う。

・食と住は充実しており、教育機関も充実している。子育て世代には魅力があるまちではないだろうか。合計特殊出生率は低いかもしれないが、人口は社会増となっている。江別市民にしか分からない魅力があるので、「住ませたら勝ち」だと思う。「仕事は札幌市でも、帰る家は江別市」でも良いのではないだろうか。また、セラミックアートセンターで陶芸教室を実施しているなど、魅力ある生涯学習に取り組んでいると思うが、市外の方は知らないと思う。隠れた魅力を掘り起こして、生活の場としての魅力を市内外に発信することが重要だと思う。

・子どもを産めるところが江別市立病院のみだが、江別市立病院以外にもあると、病院を選ぶことができて、合計特殊出生率も上がるのではないだろうか。第一次産業の農業については、これからも引き続き活性化を進めてほしい。ウクライナ紛争などで肥料・資材も高騰する中、来年度の営農が不安である。ICT化も必要だが、まず、目の前の営農をしっかり維持することが大事だと思う。

・JA道央青年部では、食育やSDGsにつながる活動を、今後も引き続き続けていきたいと思う。肥料が高騰する中、循環型農業への転換を考えていくことが大事だと思う。自分が50～60歳代になった時に、自信を持って農業をやっていられる状態でいたいと思っている。